

「イエシュアのもとに」

マルコの福音書 1:32～34

はじめに

今回はイエシュアがガリラヤ湖畔の町カペナウムを訪れになり、弟子のシモンとアンデレの家に立ち寄られた時の出来事についてお伝えしました。そこにシモンの姑が熱病で寝込んでおりましたが、イエシュアが手を取って起こされるとたちまちその熱が下がり、彼女はイエシュアをもてなした、というのが前回の出来事でした。しかしこの出来事は単なる癒しの奇蹟というだけではなく、ヘブル語の視点で捉えるならば、その中にはイスラエルに対する神の御計画が表されているということを示しました。私は毎回このヘブル語を用いての聖書講解を分かち合わせていただいておりますが、その理由は聖書という書物を人がこの世で幸せにより良く生きていくためのガイドブック、教科書的なものとして捉えるのではなく、聖書とは、神には御計画があり、それがどのようなものであるのかを説明、表現している書物であるという観点に立っているからです。つまり聖書をヘブル語の視点で捉えるとは、神の御計画の視点で捉えること、すなわち神には成し遂げたい、完成させたい事柄、夢があるということで、それを知りたい、分かち合いたいという願いをもって聖書を読む読み方であると言えます。そしてその御計画とは、一言で言うならば「神の国」です。そしてそれを構築する二つの重要な存在、それが

イエス・キリストとも言われるメシアであるイエシュア

そして

イスラエル

です。この二つの存在なくして神の御計画は絶対に成し得ません。なぜなら「神の国」とは神の王国、すなわち神がお選びになった王と、神がお選びになった場所及びそこに住まう民を指すからです。ですから聖書は初めこのイスラエル人々によって、彼らの言語であるヘブル語で書かれました。ですから聖書をヘブル語の視点で読み解くことは聖書の原点、聖書が書かれた本来の意味、目的に触れることでもあり、そしてそれは「神の国」という神の御計画を指し示すものであるということです。しかし聖書はその真実を誰にでも理解できるような形では明示せず、出来事や物語、また歌や祈りの中に隠すように、比喩的に、たとえ話のような形で記されました。それは読む者に問いかけさせる、求めさせる、尋ねさせるためであると考えられます。なぜならイエシュアが「神の国と、その義とを第一に求めなさい。(マタイ 6:33)」と言われたように、「神の国」とは、誰にでも、すべての人に与えられるものではなく、求める者、探す者にのみ与えられるものだからです。ですから今日も私たちは聖書から、自分が快適で幸せな暮らしをするためではなく、神の御計画の完成である「神の国」とは何かを求め、そしてそれを覚え、その実現を待ち望むために聖書を学んでいきたいと思っております。

【新改訳 2017】

マルコの福音書

1:32 夕方になり日が沈むと、人々は病人や悪霊につかれた人をみな、イエスのもとに連れて来た。

1:33 こうして町中の人々が戸口に集まって来た。

1. 連れて来た

イエシュアがシモンとアンデレの家に来られたその日、

- ・「夕方になり日が沈むと、人々は病人や悪霊につかれた人をみな、イエスのもとに連れて来た。」
- ・「こうして町中の人々が戸口に集まって来た。」

とあります。この二つの記述は「連れて来た」「集まって来た」という同じような結果を示しており、パラレリズム、すなわち一つの出来事を言葉を言い換えて繰り返すことで補足また強調しようとしている表現であることが分かります。ですからこの出来事もまた単なる情景描写、状況説明ではなく、重要なメッセージを持っていると考えられます。ここで「連れて来た」と訳されている箇所に使われているヘブル語、ポー(בָּאוּ)という動詞についてまず考えてみたいと思います。この最初の言及は創世記 2:19 です。

【新改訳 2017】

創世記 2:19 神である【主】は、その土地の土で、あらゆる野の獣とあらゆる空の鳥を形造って、人のところに連れて来られた。人がそれを何と呼ぶかをご覧になるためであった。人がそれを呼ぶと、何であれ、それがその生き物の名となった。

これはエデンの園において神が最初の人であるアダムに、御自分がお造りになった生き物に名前をつけさせるために「連れて来られた」という出来事です。ここにポー本来の意味があると考えられます。名前とはそのものの存在と働きを指し示すものです。つまりアダムは神がその生き物をどこに住ませどのような存在として生きるものとして造られたのかということを確認に理解した、すなわち神の意図、御心、御計画を正確に理解したということです。つまりこの時点ではアダムの心は神の御心とまったく一つであったと言えます。そんな「人」アダムに対する神の全幅の信頼が表された行為がこの「連れて来られた」ポーという言葉の持つ本来の意味であると考えられます。ですから「イエスのもとに連れて来た。」という様子、出来事は、ヘブル語の視点で捉えるならば、イエシュアの御心が、御父である神のそれとまったく一つであるがゆえに、神はイエシュアを（イスラエルの）王とし、また（イスラエルの）民をイエシュアのもとにポー「連れて来られる」ことによって神の御計画の完成である「神の国」が建てられることが「型」として表されている記述であると考えられます。

そして「集まって来た。」という箇所には、アーサフ(אָסַף)という動詞が使われています。

【新改訳 2017】

創世記

6:17 わたしは、今、いのちの息のあるすべての肉なるものを天の下から滅ぼし去るために、地上に大水を、大洪水をもたらそうとしている。地上のすべてのものは死に絶える。

6:18 しかし、わたしはあなたと契約を結ぶ。あなたは、息子たち、妻、それに息子たちの妻とともに箱舟に入りなさい。

6:19 また、すべての生き物、すべての肉なるものの中から、それぞれ二匹ずつを箱舟に連れて入り、あなたとともに生き残るようにしなさい。それらは雄と雌でなければならない。

6:21 あなたは、食べられるあらゆるものから採って、自分のところに集め、あなたとそれらの動物のための食物としなさい。」

6:22 ノアは、すべて神が命じられたとおりにし、そのように行った。

これはノアの箱舟の物語の一場面です。神はノアに食物を「集める」ようにと命じられました。ここに聖書で最初のアーサフがあります。その目的はその集められた食物によって箱舟に入るすべてのものが「生き残るように」するためでした。ここに神の御計画の厳しい側面が示されています。このノアの箱舟の物語のように、基本的には、神はこの世界とそこにいるすべての人も生き物も滅ぼされるということです。つまり「神の国」とは集められたもの、神がお選びになったものだけが入り「生き残る」救われるという御計画であり、そこには当然入ることができないもの、滅びるべきものも存在するということです。このような話をすると「聖書の神は愛の神ではないのか。愛の神がなぜ人を滅ぼすのか。」と言う人がいます。しかしそのような人は愛の意味を誤解しています。愛とはすなわち選びなのです。たとえばもし私が自分の妻と同じように他の女性を愛したらどうなるでしょうか…。このように愛とは多くのものの中からあるものだけを特別に選ぶことを意味しているのです。ですから当然愛さないもの、選ばないものも存在するわけです。愛するものは救い、しかも永遠に生きるものとし、そして愛さないものは滅ぼし、永遠に見捨てられる御方、このように神はとてつもなく強烈な愛のご性質を持った御方であると言えます。ですから神の御計画はそのご性質が完全に反映される形で成就するということが指し示されていると考えられます。

2. 夕方

またこの出来事は「夕方になり日が沈む」時に表されたことが示されていますが、この記述にも注目してみたいと思います。「夕方（になり）」と訳されているヘブル語はエレヴ(עֶרֶב)と言い、創世記 1:5 にその最初の言及があります。

【新改訳 2017】

創世記 1:5 神は光を昼と名づけ、闇を夜と名づけられた。夕があり、朝があった。第一日。

「夕があり、(朝があった。第一日。)」これは神の天地創造の御業の初め、「第一日」についての記述です。私たちは普通、一日の始まりは「朝」だと考えますが、聖書は「夕方」から始まることを示しています。実際に今日でもイスラエルでは夕方に日付が変わるそうです。ここで「朝(があった)」と訳されているボケル(בֹּקֶר)は「明日」とも訳せる言葉で、ここの文脈的にも「第一日」が終わったわけですから「明日になった」と訳すこともできます。つまり「夕方」エレヴとは初め、新しい始まりを指し示した言葉であると考えられます。神が光を選ばれ、闇と区別されたように、神は救うものと滅びるものとをはっきりと区別されます。これを神の裁きと言います。神はこのように天地創造の初めから光と闇を通して御自分が選びの神、裁きの神であることを示しておられます。「神の国」とはこの神の裁きが完了した後の、救われたものたちの次の段階、新しい時代の始まりであると言えます。ですから「夕方になり…みな、イエスのもとに連れて来た。」というこの出来事の記述には、そのような意味が「型」として表されていると考えられます。

またこのエレヴという名詞は、アーラヴ(עָרַב)「交換する、保証人になる」という意味の動詞が語源となっており、その本来の意味が最初の言及である創世記 43:9 の記述にあると考えられます

【新改訳 2017】

創世記

43:8 ユダは父イスラエルに言った。「あの子を私と一緒に行かせてください。私たちは行きます。そうすれば私たちは、お父さんも私たちの子どもたちも、生き延びて、死なずにすむでしょう。

43:9 私自身があの子の保証人となります。私が責任を負います。もしも、お父さんのもとに連れ帰らず、あなたの前にあの子を立たせなかったら、私は一生あなたの前に罪ある者となります。

この記述はアブラハムの子イサクの子ヤコブすなわちイスラエルと、その 12 人の息子の一人であるユダとの会話ですが、ユダは「あの子」と記されたイスラエルの末息子のベニヤミンの「保証人となります」と言っている箇所に聖書で最初のアーラヴがあります。それは父のもとに、その愛する息子を絶対に連れて帰って来るという固い約束を指し示していることが分かります。この出来事は、飢饉のために食料を買い求めてエジプトに行ったイスラエルの息子たちが、そこでエジプトの宰相から敵国の間者、スパイの疑いをかけられたことがきっかけになっています。彼らのうちの一人シメオンが人質として捕えられ、エジプトの宰相はその時同行していなかった末の弟のベニヤミンを連れて来るように命じた、という出来事が背景になっています。ユダはベニヤミンを連れて行けば、シメオンを連れ戻し、食料を買うこともできるので「お父さんも私たちの子どもたちも、生き延びて、死なずにすむでしょう。」と言っているのです。つまりユダが「保証人となる」ことが一家全員を救うことになることを意味しています。ですからアーラヴとは本来、家族全員、すなわちイスラエルの家を救う責任をユダが負うという意味を持っていると考えられ、これは国家としてのイスラエルを救う責任を負うことを指し示し、その責「保証人となる」御方がイエシュアであると考えられます。奇しくもイエシュアは人としてはこのユダの家系、ユダ族の子孫としてお生まれになられたことも重要な結びつきであると言えます。このように「夕方」という記述は、エレヴというヘブル語の視点で捉えるならば、それに加えてその動詞形であるアーラヴの持つ本来の意味から、イエシュアはこのイスラエルの救い、そして「神の国」の完成についての全責任を負っておられるというメッセージをも導き出すことができるのです。

3. 日が沈む

冒頭でお伝えした通り、神はイエシュアを王として、そしてイスラエルの地とそこに住む民とをお選びになりました。ですから「神の国」は一般的に捉えられている天国に対するイメージとは大きく異なります。イエシュアが再びこの地上に、イスラエルの地に帰って来られる時にそれが始まるのです。しかしその時のイスラエルの地とその民の状況は「日が沈む」また「病人や悪霊につかれた人」という記述に表されているように、悲惨な、危機的な状態となっている時であると考えられます。「日が（沈む）」という箇所に使われているヘブル語シエメシュ(**שָׁמַשׁ**)の最初の言及からもその様子がうかがえます。

【新改訳 2017】

創世記

15:5 そして主は、彼を外に連れ出して言われた。「さあ、天を見上げなさい。星を数えられるなら数えなさい。」さらに言われた。「あなたの子孫は、このようになる。」

15:6 アブラムは【主】を信じた。それで、それが彼の義と認められた。

15:7 主は彼に言われた。「わたしは、この地をあなたの所有としてあなたに与えるために、カルデア人のウルからあなたを導き出した【主】である。」

15:8 アブラムは言った。「【神】、主よ。私がそれを所有することが、何によって分かるでしょうか。」

15:9 すると主は彼に言われた。「わたしのところに、三歳の雌牛と、三歳の雌やぎと、三歳の雄羊と、山鳩と、鳩のひなを持って来なさい。」

15:10 彼はそれらすべてを持って来て、真っ二つに切り裂き、その半分を互いに向かい合わせにした。ただし、鳥は切り裂かなかった。

15:11 猛禽がそれらの死体の上に降りて来た。アブラムはそれらを追い払った。

15:12 日が沈みかけたころ、深い眠りがアブラムを襲った。そして、見よ、大いなる暗闇の恐怖が彼を襲った。

15:13 主はアブラムに言われた。「あなたは、このことをよく知っておきなさい。あなたの子孫は、自分たちのものでない地で寄留者となり、四百年の間、奴隷となって苦しめられる。

15:14 しかし、彼らが奴隷として仕えるその国を、わたしはさばく。その後、彼らは多くの財産とともに、そこから出て来る。

これは神がアブラムとその子孫を祝福する契約が交わされた場面です。「あなたの子孫は、(天の星のように)このようになる。」また「この地(イスラエル)を所有として与える」という祝福の約束のしとして、いくつかの動物が二つに切り裂かれたことが分かります。この詳細な意味についてはまたの機会にしたいと思いますが、アブラムの子孫が神の祝福に入る道は容易いものではありません。この時に 15:12「日が(沈みかけた)」と訳されているのが聖書で最初のシメシュです。そしてその時「見よ、大いなる暗闇の恐怖が彼を襲った。」と記されています。シメシュとは「太陽」とも訳される名詞ですが、その本来の意味は決して輝かしい、明るいイメージのものではなく、むしろこのように太陽が沈んでしまった状態すなわち「大いなる暗闇の恐怖」と呼ばれる状態を指し示しています。イスラエルの民の歴史はまさにこれを指し示すような迫害と離散、奴隷の歴史でした。世界中で彼らのような苦難を味わってきた民族は他にありません。しかしこれらの出来事も後にやって来る「大患難」とも呼ばれる、本当の「大いなる暗闇の恐怖」の「型」にしかすぎず、やがてイスラエルの民とその地にそれが襲いかかる時が来ます。イスラエルはかつてなかったほどの危機に直面するでしょう。しかしその時こそイエシュアが来られる時なのです。これをイエシュアの「地上再臨」と言います。そして「わたしはさばく」と記されているように、イスラエルを救われ、これに敵対する全勢力を滅ぼされます。それがこのシメシュの最初の言及から考えられる、「(夕方になり)日が沈む」という記述が指し示す神の御計画であると考えられます。

【新改訳 2017】

マルコの福音書 1:34 イエスは、様々な病気にかかっている多くの人を癒やされた。また、多くの悪霊を追い出し、悪霊どもがものを言うのをお許しにならなかった。彼らがイエスのことを知っていたからである。

4. 癒す

前節の解釈から言って、この出来事の記述が、イスラエルに再臨されたイエシュアが、神がお選びになった民を救うために、「様々な病気」に示される死とすべての罪、そして「悪霊」悪魔、サタンを追いつ出され、そのすべての働きを止めさせることが表されていると考えられます。それが「悪霊どもがもの言うのをお許しにならなかった。」という記述の中に表されていると考えられます。ではヘブル語の視点からもう少し詳しく見てまいりましょう。

まずイエシュアは「(人を) 癒された」と訳されているのがラーファー(אָפֶן)「いやす」という意味の動詞です。創世記 20:17 にその最初の言及があります。

【新改訳 2017】

創世記

20:17 そこで、アブラハムは神に祈った。神は、アビメレクとその妻、また女奴隷たちを癒やされたので、彼らは再び子を産むようになった。

20:18 【主】が、アブラハムの妻サラのことで、アビメレクの家すべての胎を堅く閉じておられたのである。

ゲラルの王アビメレクは、アブラハムの妻サラを自分の妻にしようとしたために、神の怒りによって彼の家から子どもが産まれないという状態に陥っていました。しかし自分の間違いに気づかされたアビメレクは、サラをアブラハムのもとへ返したことで、事態は収束に向かいます。ここでアブラハムの祈りによって「(神は…) 癒された」という箇所には聖書で最初のラーファーがあります。このようにラーファーとは本来、アブラハムの祈りによって、子を産むようになることを意味しています。子どもが産まれない国に未来はありません。聖書において子どもを産み、そして増えることは祝福の象徴です。つまりアブラハムによって祝福される、というのがラーファーの持つ意味だと考えられ、まさにそれは創世記 12 章に記された神のアブラハムとその子孫に対する約束

【新改訳 2017】

創世記

12:3…わたしはあなたを大いなる国民とし、あなたを祝福し、あなたの名を大いなるものとする。あなたは祝福となりなさい。

12:3 わたしは、あなたを祝福する者を祝福し、あなたを呪う者をのろう。地のすべての部族は、あなたによって祝福される。」

を指し示す「型」であると考えられます。そしてこの約束の成就である「神の国」において、アブラハムの子孫、イスラエルの存在が世界の国々の繁栄と祝福の基、源となることを表していると考えられます。「大いなる暗闇の恐怖」に襲われ、危機的状況にあったイスラエルが、イエシュアが再臨されることでこのような国へと劇的な変貌を遂げる、これが神の御計画のすばらしさです。

5. 追い出す

そしてイエシュアが「多くの悪霊を追い出し、」という記述について。ここで「追い出す」と訳されているのはガーラシュ(טָרַשׁ)という動詞で、最初の言及は創世記 3:24 です。

【新改訳 2017】

創世記

3:24 こうして神は人を追放し、いのちの木への道を守るために、ケルビムと、輪を描いて回る炎の剣をエデンの園の東に置かれた。

これは罪を犯したアダムとエバが「エデンの園」を「追放」された場面です。このようにガーラシュとは本来エデンの園から追い出されることを指しており、この「エデンの園」もまた「神の国」を指し示すものですから、「神の国」には彼ら悪霊、サタンとも呼ばれる悪魔は絶対に入ることができないことが表されていると考えられます。そしてイエシュアは「悪霊どもがものを言うのをお許しにならなかった。」とあります。ここで「お許しにならなかった」という箇所にはナータン(נָתַן)「与える、置く、渡す」という意味の動詞が否定形で使われています。この最初の言及は創世記 1:17 です。

【新改訳 2017】

創世記

1:16 神は二つの大きな光る物を造られた。大きいほうの光る物には昼を治めさせ、小さいほうの光る物には夜を治めさせた。また星も造られた。

1:17 神はそれらを天の大空に置き、地の上を照らさせ、

これは神の天地創造の御業の一場面ですが、「二つの大きな光る物」を「(天の大空に) 置き」と訳されている箇所に聖書で最初のナータンがあります。このように、ナータンとは本来、「地の上」を「治めさせ」るために「天の大空に置かれる」ことを意味していると考えられます。この動詞が「お許しにならなかった」と否定形で使われているということはすなわち、「神の国」において彼ら悪魔の支配力、影響力は完全に失われ、天にも地にも彼らは「置かれない」、働くことも存在することさえもイエシュアは「お許しにならない」ということが表されていると考えられます。

6. おわりに

このように、神の御計画の完成とは、神がお選びになったものと、そうでないものを同じ場所、同じ世界に存在させないようにすること、完全に区別してもう二度と絶対混ざり合うことがないように、永久に引き離してしまうことだと言えます。今の時代、この世界は絶えず揺れ動き、喜んだり悲しんだり、何が正しく、何が間違っているのかと悩み、迷う…。善と悪が混ざり合い、はっきりしない、混乱、混沌とした状態にあると言えます。神はそんなこの世界を終わらせ、光と闇のように、はっきりと区別なさろうとしておられます。イエシュアがこの地上に、イスラエルに再臨される時、イエシュアのもとにそれが現実のものとなります。その日が来ることを信じ、覚えてイエシュアを待ち望みましょう。